

短大特任教員教育研究業績書

平成 30 年 5 月 14 日

| | | | | |
|-------------------|-----------|----------------|-----|----|
| 氏名 | ふりがな | 所属 | 職 位 | 性別 |
| 小松原 祥子 (旧姓：野上) | こまつばら さちこ | 保育学科 通信教育課程 | 准教授 | 女 |

担当科目名

音楽表現 IA、音楽表現 IB、音楽表現 II

学 歴

| 和暦(西暦)年 月 | 事 項 | 学位 |
|--------------------|--|---------|
| 平成 8 (1996) 年 4 月 | 広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学専攻(ピアノ)入学 | |
| 平成 10 (1998) 年 2 月 | ウィーン春季国際音楽ゼミナール修了 | |
| 平成 12 (2000) 年 3 月 | ウィーン春季国際音楽ゼミナール修了 | |
| 平成 12 (2000) 年 3 月 | 広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学専攻(ピアノ専科)卒業 | 学士(教育学) |
| 平成 12 (2000) 年 4 月 | 広島大学大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻(音楽文化教育学)博士課程前期 入学 | |
| 平成 12 (2000) 年 8 月 | ウィーン夏季国際音楽ゼミナール修了 | |
| 平成 14 (2002) 年 3 月 | 広島大学大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻(音楽文化教育学)博士課程前期 修了 | 修士(教育学) |
| 平成 14 (2002) 年 4 月 | 東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻(音楽教育)博士後期課程入学 | |
| 平成 18 (2002) 年 3 月 | 東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻(音楽教育)博士後期課程修了 | 博士(学術) |

教 育 歴 ・ 職 歴

| 名 称 | 期 間 | 教育内容又は業務内容 |
|-------------------------------|--|---|
| 東京芸術大学音楽学部 (ティーチング・アシスタント) | 平成 15 年 5 月～平成 16 年 2 月 | 「総合演習」(音楽学部・美術学部合同)・「音楽科教科教育法」(音楽学部)のグループ研究指導 |
| 東京芸術大学音楽学部 (リサーチ・アシスタント) | 平成 16 年 4 月～平成 17 年 2 月 | 「総合演習」・「音楽科教科教育法」のグループ研究指導 |
| 国立教育政策研究所 | 平成 17 年 5 月～平成 18 年 3 月 | 高等教育研究部・国際研究協力部 研究補助 |
| 武庫川女子大学音楽学部 (非常勤講師) | 平成 18 年 4 月 ～平成 22 年 3 月 平成 23 年 4 月 ～平成 28 年 3 月 平成 20 年 4 月 ～平成 22 年 3 月 平成 21 年 4 月 平成 22 年 9 月 ～平成 29 年 3 月 平成 23 年 4 月～平成 29 年 3 月 | 「楽書講読」担当 「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」「音楽文化論—唱歌の歴史—」「器楽合奏Ⅱ」(演奏学科クラス・音楽療法学科クラス)担当 大学設置審による課程認定の審査を受け、武庫川女子大学音楽学部非常勤講師「音楽科指導法Ⅰ」「音楽科指導法Ⅱ」「音楽科指導法Ⅲ」「音楽科指導法Ⅳ」の資格有りと認定 「音楽科指導法Ⅱ」「音楽科指導法Ⅳ」担当 「音楽科指導法Ⅰ」「音楽科指導法Ⅲ」担当 |

| | | | | |
|---|------------------------------------|--|--------------------|-----|
| | 平成24年4月 ～平成28年3月 | 「音楽教育学研究」担当 | | |
| | 平成24年4月 ～平成25年3月 | 「附属中高授業見学会 ー実際の授業を参観し、教職への意識を高めようー」担当 | | |
| | 平成25年4月 ～平成28年3月 | 「教職実践演習」担当 | | |
| 兵庫県立鈴蘭台高等学校 (平成19年4月から統合により、兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校と名称変更) 非常勤講師 | 平成18年4月 ～平成20年3月 | 「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」、終業式・記念式典の校歌伴奏と歌唱指導担当 | | |
| 兵庫県立川西明峰高校 非常勤講師 | 平成20年4月 ～平成26年3月 | 「演奏法」(保育士・幼稚園教諭志望者のピアノ指導)担当 | | |
| 小田原短期大学 | 平成28年4月～現在 | 保育学科通信教育部 准教授 「音楽表現ⅠA」、「音楽表現ⅠB」担当 | | |
| | 平成30年4月～現在 | 保育学科通信教育部 准教授 「音楽表現Ⅱ」担当 | | |
| 京都市立芸術大学 音楽学部 非常勤講師 | 平成29年4月 ～平成30年3月 | 「教育課程論」「音楽科教育法Ⅰ」「音楽科教育法Ⅱ」「音楽科教育法Ⅲ」担当 | | |
| 所 属 学 会 等 | | | | |
| 名 称 | 活動期間 | 活動内容 (役職等の活動を含む) | | |
| 日本音楽教育学会 | 平成11年～現在 | 会員・学会発表 | | |
| 日本教師教育学会 | 平成14年～現在 平成17年10月 ～平成18年1月まで | 会員・学会発表 理事会幹事 | | |
| 日英教育学会 | 平成15年～現在 | 会員・学会発表・スカラシップ受賞によるイギリスでのフィールドワークと報告 | | |
| 日本保育学会 | 平成27年4月～現在 | 会員 | | |
| 日本保育者養成学会 | 平成28年10月～現在 | 会員 | | |
| 社 会 活 動 等 | | | | |
| 名 称 | 活動期間 | 活 動 内 容 | | |
| フェスティバル | 平成28年10月 | 0歳～6歳児対象の親子リトミックワークショップ (福田明子・小松原祥子・萩原恵里) | | |
| リトミック体験 | 平成29年3月 | 保育所における5・6歳児対象のリトミックワークショップ (福田明子・小松原祥子) | | |
| 担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等 | | | | |
| 名 称 | 取得年月 | 取 得 機 関 | | |
| 中学校・高等学校教諭一種免許状(音楽) | 平成12年3月 | 広島県教育委員会 | | |
| 修士(教育学) | 平成14年3月 | 広島大学 | | |
| 中学校・高等学校教諭専修免許状(音楽) | 平成14年3月 | 広島県教育委員会 | | |
| 博士(学術) | 平成18年3月 | 東京藝術大学 | | |
| 研 究 実 績 に 関 す る 事 項 | | | | |
| 代表的な著書、論文等の名称 | 単著共著の別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称 | 概 要 |

| | | | | |
|---|----|-------------|---|---|
| <p>(著書) 1. 『英国の教育』</p> | 共 | 平成 29 年 5 月 | 東信堂 | <p>本書は、英国の教育に関する専門書である。全 295 頁。筆者は、「音楽教育」のトピックを寄稿した。本稿では、現代の英国における幼児から中等学校段階の音楽教育の特色を挙げた。幼児教育における音楽は、乳幼児期基礎段階 (Early Years Foundation Stage=EYFS) の「表現芸術とデザイン」に含まれる。EYFS 2014 年版では、「幅広い媒体 (素材) や材料を探索して遊べる」ことや、ICT を活用した活動が推奨されている。</p> <p>また、英国では「創造的音楽学習」の源流があり、それが日本における「音楽づくり」や「音楽あそび」に影響を及ぼしていることを示した。</p> <p>(担当部分 : p.116 トピック 06 音楽教育) 分担執筆 (34 名) (高妻紳二郎、飯田明葉、<u>小松原祥子</u>、佐藤千津、高野和子、ほか)</p> |
| <p>2. 『幼児教育における表現Ⅰ (理論的研究編)』</p> | 共著 | 平成 30 年 1 月 | 三恵社 | <p>本書は、幼児教育における表現に関する理論的研究の専門書である。筆者は『『表現指導法』としての幼児の器楽合奏指導法に関する理論的研究—質的分析を用いた自由記述の評価方法とは—』という研究論文を寄稿した。本稿では、幼児の器楽合奏に対する学生の自由記述の質的分析を行い、受講者の学びの実感と今後の課題を示した。これによって、「リズム」「教えること」「聴き合い」「楽しい」の 4 つの集約的コードが抽出され、学習成果として「リズム」「ハーモニー」「テンポ」「音量バランス」「アレンジ」「楽器の多様性」「保育的視点への転換」等が明らかになった。そして学習の改善点として、一斉授業において全員が全ての楽器を経験するためには、ピア・ティーチングを効果的に行うことが必要であることを提示した。(共著者: 崎浜聡、山西多加、<u>小松原祥子</u><pp.46~62>その他 12 名)</p> |
| <p>3. 『幼児教育における表現Ⅱ (実践的研究編)』</p> | 共著 | 平成 30 年 1 月 | 三恵社 | <p>本書は、幼児教育における表現に関する実践的研究の専門書である。筆者は『『Peer Teaching』による幼児への器楽合奏指導法に関する実践的研究—エンカウンター・グループの手法を援用して—』という研究論文を掲載した。本稿では、幼稚園教職科目「表現 (音楽)」における幼児の合奏アンサンブルの授業において、「教える役割」「教えられる役割」「幼児の立場」の 3 つの役割を明確にした模擬保育を行うため、「エンカウンター・グループ」の手法を取り入れた効果的な「ピア・ティーチング」の方法を提示した。</p> <p>(共著者: 崎浜聡、山西多加、<u>小松原祥子</u>(pp.57~64)その他 12 名)</p> |
| <p>(学術論文) 1. 「乳幼児を対象とした親子リトミックワークショップの事例研究」</p> | 共著 | 平成 29 年 3 月 | 小田原短期大学『小田原短期大学研究紀要』第 47 号, pp.142-152. | <p>本研究では、0 歳～6 歳までの全ての年齢段階を含む乳幼児と親のリトミックワークショップを行うことにより、①乳幼児はリトミックの何に楽しさを感じ、年齢段階による違いはあるのか、②親子リトミックでは、親はどのような活動に楽しさを見出すのか、③1 回完結型のリトミックで親子が「楽しさ」を感じ取るためには、どのような要素を重視すべきか、を明らかにした上で、1 回完結型の特性と限界について考察した。(共著者: <u>小松原祥子</u>、福田明子、萩原恵里)</p> |

| | | | | |
|---|-----------|---------------------|--|--|
| <p>(研究ノート)</p> <p>1. 「現代イギリスの音楽科教員養成カリキュラムにおける実践的指導力の育成—2012年度ロンドン大学教育研究所 PGCE 中等学校音楽科を事例として」</p> | <p>単著</p> | <p>平成 26 年 9 月</p> | <p>日英教育学会『日英教育研究フォーラム』第 18 号, pp.87-97.</p> | <p>ロンドン大学教育研究所中等学校音楽科 PGCE における平成 24 年度のカリキュラムを分析し、音楽教員の実践的指導力の育成という観点から特徴と課題を探った。その結果、例えば観察実習で「音楽的に非常に能力のある生徒と学習に困難のある生徒を探し、彼らがどのような音楽的反応を示しているかを記録する」といった課題が挙げられているように、授業課題が問題解決型で技能ベースであることが明らかになった。</p> |
| <p>2. 「保育者養成課程のスクーリング『音楽表現』における弾き歌いを中心とした学習効果について—フォルマシオン・ミュージカルを基盤として—」</p> | <p>共著</p> | <p>平成 29 年 3 月</p> | <p>小田原短期大学『小田原短期大学研究紀要』第 47 号, pp.142-152.</p> | <p>保育者の「弾き歌い」には、幼児の「多様な表現を認める聴く力」と、「多様な表現を発展させる、音楽の枠を超えた幅広い技能」が含まれる、という「弾き歌い」の技能修得の目標が文献研究から明らかになったが、スクーリングという短期間の授業で修得する技能は限られてくる。</p> <p>本来、このような技能を身に付けるには長期に渡る指導と学習が不可欠である。従って本研究ではスクーリング「音楽表現」において、楽曲を多角的なアプローチで学ぶフォルマシオン・ミュージカルの理念を基盤とした短期型の授業実践を行い、短期間の修得で最大限の学習効果を得ることを目指した。そして、その教授法による受講生への学習効果を測るため、受講生に対して事前・事後アンケート調査を実施し、統計的手法を用いて分析した結果、大きな学習効果があったことを示すことができた。</p> <p>(共著者：小松原祥子、福田明子、木村文子、萩原恵里、崎浜聡)</p> |
| <p>(資料)</p> <p>1. 「体験構造分析による『幼児の音楽表現力』の解明に関する理論的研究」</p> | <p>共著</p> | <p>平成 30 年 3 月</p> | <p>小田原短期大学『小田原短期大学研究紀要』第 48 号</p> | <p>本稿は、幼児の音楽表現力に関する理論的研究である。本稿では、「表現(音楽)」において、幼児の表現の生成過程を分析的に捉えることを目的とした。先行研究では、幼児の音楽表現力とは身体・かかわり・イメージに関わる要素が軸となった幼児の保育的日常生活(行為面)から捉えられたものであったが(外的知覚)、本研究では、その保育的日常生活が生成される意識の体験領域に視点を変換する現象学的方法(「外的知覚」から「内的知覚」へ)による「体験構造分析」から幼児の音楽表現力の(「行為の」構造面)を浮き彫りにする研究の方途を提起した。</p> <p><筆者担当部分：研究目的、幼児の音楽表現力とは、先行研究の検討、まとめ></p> <p>(共著者：小松原祥子、崎浜聡)</p> |
| <p>(学会発表)</p> <p>1. 「音楽科における声を出す雰囲気づくりと教師の力量」</p> | <p>単独</p> | <p>平成 20 年 3 月</p> | <p>第 1 回東アジア教師教育研究国際シンポジウム 於 法 政 大 学 <i>Proceedings</i>, p.110. (口頭発表)</p> | <p>筆者による実践研究として、歌唱指導で声を出さない生徒に対し、少人数グループでポピュラー音楽を選択し、練習を進め、発表することによって歌うようになった事例を紹介した。これは小泉氏の言う「コモン・ミュージック」を生徒自身が選択したことによる効果であると言える。(『分科会 発表論文集 6A 教師教育の教授法』 pp.1-4 執筆)</p> |
| <p>2. 「イングランドの中等学校音楽科における個別の生徒への支援の概念—教員養成課程における学生の実践力育成の観点として—」</p> | <p>単独</p> | <p>平成 23 年 10 月</p> | <p>日本音楽教育学会 42 回大会 於 奈良教育大学 (口頭発表)</p> | <p>ブレイとライト、及びロンドン大学教育研究所 PGCE の教育実習課題における「個別化」の概念を検討した。その結果、①一つの教材から多面的な指導法を考える、②生徒の技能・知識・態度の様々な段階について記録するための枠組みを作る、③教育実習における生徒の成果の違いとして、生徒の学習過程の記録を残し、大学の授業で報告する、等の特徴が明らかになった。</p> |

| | | | | |
|---|------------------------------------|---|---|---|
| 3. 「イングランドにおける正教員資格の基準と音楽教師の専門性」 | 単独 | 平成 24 年 10 月 | 日本音楽教育学会 43 回大会 於 東京音楽大 学 (口頭発表) | 平成 24 年度ロンドン大学教育研究所中等学校音楽科 PGCE のカリキュラムを事例とし、学生が音楽指導の課題を自覚す るための方法を探った。その結果、①学校現場を基盤とした アクションリサーチ、②多様なレベルの生徒を対象とした作 曲かアレンジ、リハーサルと指揮、文献を用いた省察と分析、 等の課題が設けられていた。 |
| 4. 「イギリスにお ける音楽の教師教 育」 | 単独 | 平成 25 年 9 月 | 日英教育学会第 22 回 大会 於 兵庫大学 (口頭発表) | 平成 24 年度ロンドン大学教育研究所中等学校音楽科 PGCE のカリキュラムを事例とし、音楽教師の職能成長という観点 から特徴と課題を探った。その結果、学生の実地授業の開始 から研究授業までのビデオ撮影を続け、それに基づいた分析 を実習が終わった後に大学で行うこと等が明らかになった。 |
| 5. 「イギリスにお ける音楽のインフ ォーマル学習の支 援プログラムの可 能性—中等教育段 階を中心として —」 | 単独 | 平成 26 年 10 月 | 日本音楽教育学会第 45 回大会 於 聖心 女子大学 (口頭発表) | イギリスの「音楽の未来」プログラムのインフォーマルラー ニングの特色と課題を通し、音楽のインフォーマル学習の可 能性について考察した。その結果、CD を繰り返し聴いて模 倣することにより聴取力が身に付き、多様な音楽を聴いて模 倣する試みに繋がること等が明らかになった。 |
| 6. 「イギリスにお ける音楽のノンフ ォーマルティーチ ングの理念と方法 —中等学校の生徒 と実践家の役割 —」 | 単独 | 平成 27 年 10 月 | 日本音楽教育学会第 46 回 於 シーガ イアコンベンションセ ンター (宮崎) (口頭発表) | 「音楽の未来」のノンフォーマルティーチングに焦点を当て、 その理念と課題を考察した。その結果、手拍子リズム叩きの ウォームアップで始まり、小さな音楽的アイデアを作曲へ と発展させるアンサンブル指導の段階的な方法が明らかにな った。 |
| 7. 「保育者養成課 程における『音楽 表現』の到達目標 に関する研究 —短大通信教育課 程スクーリングを 事例として」 | 単独 | 平成 29 年 10 月 | 第 48 回 日本音楽教 育学会 愛知大会 (於 愛知教育大学 (口頭発表) | 短大保育者養成課程スクーリング「音楽表現」における学生 の「振り返りシート」の項目「今日の授業でどのようなこと が難しかったですか」に対する自由記述をコーディングし、 コードマトリックスによって分類し、学習者が感じた学習内 容の「難しさ」の総計を難易度指数とし、分析した。その結 果、ピアノ経験者の方が多領域に渡る詳細な難しさを示し、 初心者より難しさを感じる内容が多かったこと、初心者の難 しさは、多くの領域よりも、ピアノと弾き歌いなどに集約さ れていることが明らかになった。 |
| 8. 「保育者養成校 スクーリングにお ける保育内容『表 現』科目間連携の 可能性 (4) —「音 楽表現 I A」「音 楽表現 I B」の振 り返しシート記述か ら—」 | 共同 (ポ ス タ ー 発 表) | 平成 30 年 3 月 | 第 2 回 日本保育者養 成学会研究大会 (於 共立女子大学 神田一 ツ橋キャンパス) | 本研究では「表現」実技科目の目的意識を共有することによ り、学生の学びの質向上を目指すと共に、幼稚園教育要領で 求められる「表現」を総合的に教授できるかどうかを検討し た。方法としては、振り返りシートの自由記述についてテキ ストマイニングソフト KHcoder を用いて分析を行った。その 結果、学生の学びとして「保育的配慮」、「アンサンブルにお けるタイミングや響きのバランス、仲間と創り上げていく難 しさ」、「人前での弾き歌いのため積極的に練習に励む姿勢と 今後の継続的学習の必要性の実感」が窺えた。連携について は学生の学びの特性にばらつきはあるが、総合すれば互いに 補填し合っていた。 (木村文子、萩原恵里、福田明子、近藤正子、小松原祥子) |
| その他 (表彰等) | 平成 16 年 7 月 | 日英教育学会第 5 回日英教育学会スカラシップ受賞 「イングランドの音楽科教員養成における理論と実践の統合—ホマトンカレッジのカリキュ ラム分析を通して—」『日英教育研究フォーラム』日英教育学会第 8 号, pp. 69-78 | | |